

スローライフ・フォーラム in ゆすはら
報告書

令和7年1月

-目次-

※全体敬称略

1 概要

2 内容

- ・ 町内見学
- ・ 夜なべ談義
- ・ 分科会
- ・ シンポジウム

3 トピック

4 開催日以外で

5 感想



1 概要

- ・開催日：2024年11月9日（土）・10日（日）
- ・場所：「ゆすはら・夢・未来館」、「ゆすはら座」、ほか町内
- ・主催：スローライフ・フォーラム in ゆすはら実行委員会
- ・後援：高知大学
- ・協力：スローライフの会
- ・参加者：のべ約200人
（視察・交流会60人+分科会40人+シンポジウム100人）
- ・目的：
 - これまで梶原町がやってきたことを改めて周知し発信し、その価値を再認識してもらう。
 - 「若い人」がそれをどう継承してくれるか、そのためのアクションに。
 - 集落活動センターのそれぞれの活動、「集落」活動にスポットをあてる。
 - スローという物差しで地方、地域を評価するきっかけとする。
- ・テーマ：「集落と若者と。」
- ・内容：
 - <11月9日（土）>
 - 「町内見学」
 - 「夜なべ談義」（交流会）
 - <11月10日（日）>
 - 分科会
 - シンポジウム「セレモニー」「分科会報告」「パネルディスカッション」
- ・登壇者：
 - 分科アドバイザー・進行
 - 川竹大輔（高知大学理事特別補佐、スローライフの会会員）
 - 坪井ゆづる（地方自治総合研究所客員研究員、スローライフの会共同代表）
 - パネルディスカッション
 - 濱田省司（高知県知事）
 - 吉田尚人（梶原町長）
 - 増田寛也（日本郵政社長、スローライフの会共同代表）
 - 神野直彦（東京大学名誉教授、スローライフの会顧問）
 - 中村桂子（JT生命誌研究館名誉館長、スローライフの会共同代表）
 - 野口智子（ゆとり研究所、スローライフの会共同代表）

2 内容

<11月9日(土)>

(1) 「町内見学」

・時間：14:00~17:45

・コース：「太郎川公園 茶堂」、「集落活動セ

ンターおちめん」、「集落活動センターゆすはら西」、「雲の上の図書館」

・参加者：スローライフの会会員及び高知大学大学生 28人

①「集落活動センターおちめん」

内部を見学後、推進委員会会長・上田末喜さんから全体の説明をいただき、その後、特産品づくり部会「チームシルク」の活動について瀬戸口登貴恵さんからお話をうかがいました。シフォンケーキのおやつが好評でした。

②「集落活動センターゆすはら西」

施設長・平脇慶一さんから説明をいただきました。鹿の角なども見せていただき、臨場感あるジビエ学習となりました。

他では、その都度、高知県・梶原町職員が解説し、「雲の上の図書館」では、各人が自由にゆっくりした時間を過ごしました。



(2)「夜なべ談義」(交流会)

- ・時 間：18：00～20：00
- ・会 場：「トップタイム」
- ・参加者：地元関係者、スローライフの会、高知大学大学生など合計 60 人
- ・内 容：地元・外部それぞれの参加者が次々とスピーチをしました。高知県ならではの皿鉢料理、梶原名産のキジを使った鍋などを楽しみながら、親しく交流しました。テーブルには地元に関んだ名前がつけられ、席次は抽選で。町担当者による、細やかな工夫がありました。
- ・司 会：スローライフの会 小牟田弘子（長崎県雲仙市から参加）
梶原町役場 兵頭眞弥（まちづくり産業推進課）



<11月10日(日)>

(1) 分科会

・会場：「ゆすはら・夢・未来館」
・参加者：合計約60名（梶原町民、梶原高校高校生、高知大学大学生、スローライフの会会員など）

・時間：9:30～11:30

・テーマ：「集落と若者と。」

・内容：全体テーマと同じテーマをあえて掲げ、深く話し合う場としました。それぞれの事例発表者が活動を詳しく話したのち、聴衆も含めて討論をし、進行役から提言やアドバイスをいただきました。



「I 分科会」

アドバイザー・進行：川竹大輔（高知大学理事特別補佐）

事例発表

- ① 「雲仙人（くもせんにな）の会」小牟田弘子（事務局、長崎県雲仙市）

若い人を中心に、楽しく繋がりを育てる活動を紹介。

- ② 「梶原町若者定住対策審議会（愛称：わかてい）」島村香弥（梶原町連合青年団、役場職員）、下元 充（高知県農業協同組合）

これまでの活動と、これからの活動を紹介。

- ③ 「梶原高校」（高校生3人）大塚彰人・石原憧真・佐伯 光
商品開発などの活動を紹介。



「Ⅱ分科会」

アドバイザー・進行：坪井ゆづる（地方自治総合研究所客員研究員）

事例発表

- ① 「十津川村谷瀬の散歩道と純米酒づくり」室崎千重（奈良女子大学准教授）
集落住民と女子大生で整備した散歩道、酒米から造った純米酒について。
- ② 「栲原町若者定住対策審議会（愛称：わかてい）」宮内大輔（栲原学園PTA会長）、川田沙月（栲原町社会福祉協議会）
これまでの活動と、これからの活動を紹介。
- ③ 「集落活動センター四万川」西村大地（キジ飼育・加工）
新たな特産になりつつあるキジについて紹介。



（２）昼食休憩

・会場：「ゆすはら・夢・未来館」、栲原町役場で。



(3) シンポジウム

- ・会場：「ゆすはら座」
- ・時間：12：30 開場、13：00 開会～15：00 閉会
- ・参加者：100人（梶原町民、高知県民、高知大学、スローライフの会など）
- ・総合司会：宮内大輔（若者定住対策審議会 会長）



「セレモニー」

歓迎の言葉：

吉田尚人（スローライフ・フォーラム in ゆすはら 実行委員会 委員長）

挨拶：

濱田省司（高知県知事）



「分科会報告」

・分科会参加の事例発表者もステージに上がり、各分科会の内容をアドバイザーから報告しました。

アドバイザー・進行：

川竹大輔（高知大学理事 特別補佐）

「集落と若者と。」のテーマで分科会を開きました。自分も高知大学で学生に地域内定住を勧めるプロジェクトに参加しているので参考になりました。事例発表者、若者、高校生、それぞれ、頼もしいメンバーで開催できました。



雲仙市・小牟田弘子さんから「雲仙人（くもせんじん）の会」の取組について事例発表がありました。7つの町が合併した雲仙市においては、まだ旧町の垣根があり、人の繋がりを深くしていこう、ものづくり・ことおこしをしている人同士が頑張っていこうとしているそうです。人に焦点を当てて採り上げたパンフレットを作り、若い人がまずは地域を越えて楽しく繋がっていこうと活動しているとのことでした。

「若者定住対策審議会」は平成4年からの行われている、梶原町が若い人の意見を聞こうという取り組みです。若い人がまちに提案をしたり、何か企画したりしてきているそうです。この4月からのメンバーには、町長から「若者世代が住みたくなる。子育てしたくなるまちは？」というテーマが与えられていて、どう提言できるか学び、考え中ということでした。お2人は社会人でそれぞれのお仕事をお持ちです。「とても子育てしやすい町です」というお話や、一方「専門のお医者さんにかかるのが少し不便」という意見もありました。

参加された高校生は、県外・町外から来て寮で暮らしているとのことでした。「フードエコロジー班」ということで、梶原の魅力を詰め込んだ「つめつめキーマカレー」というものを商品開発しました。地域で販売したところ、200のつもりが、300食も売れたそうです。今後、進学で外に出ていく考えがあり、将来的にこの町でどのような仕事をして行くのか、どう暮らすのかまだ具体的にイメージがみえないそうです。先日開かれた「子ども議会」に出た林業で働く魅力な

どについて、もっと発信し高校生にも伝えてほしいというお話もありました。

梶原は集落活動センターなどが盛んで、高知県でも地域づくりの先進地です。ただ、若者や高校生やセンターが、充分お互いを知り合って、目標を1つにしているかというあたりには、まだ課題があるかなと思いました。若者たちが、センターで生き生きと暮らし働いている人たちの姿を見て、ここに戻って来たい、女性にも働きやすい土地だと思ってほしいです。

分科会には大学生も参加していて、「センターの魅力が若い人にどう伝わっているのか」など、質問していたのが印象的でした。



アドバイザー・進行：

坪井ゆづる（地方自治総合研究所客員研究員）

奈良女子大学・室崎千重さんから奈良県十津川村谷瀬（たにぜ）での、これまで10年にわたる取組をうかがいました。谷瀬集落には観光名所の50mの吊り橋があり、ここで物も売ろうと「日本酒でも作ろうか」と軽いノリで考えたのが、数か月後には即実行したそうで、「純米酒 谷瀬」ができました。「食べる谷瀬シリーズ」として、「酒粕アイス」「干し芋」のパッケージなどは女子大生がデザインをしているそうです。

集落にとっては学生の参加が「やるぞ」という最後の一押しとなった、若い目線の取組や集落の人が苦手なことを学生が受け持った。学生にとっては地域を変える手ごたえを得たなど、それぞれに連携の効果があつたそうです。集落に外の人が入り出す風通しの良さもあつて、移住者も増えているとのことでした。

梶原町の宮内さん、川田さんは13期目の「わかてい」さんです。まだ任期が始まったばかりで、具体策はこれからですが、先輩たちは、クリスマスパーティーや出会いの場づくりなどしたり、よさこい祭りに参加したり、町のCMを作つて高知でグランプリを取ったりもしてきたことを紹介されました。川田さんは結婚を機にこの町に住むようになったが「ここは町民が受け入れてくれます」との印象を述べられました。

西村さんは建設業の跡継ぎとして戻って来た方。いったんは「広い世界を見たい」と町を出たけれど、「戻ってみると故郷はいい、自然しかなくてそれがいい」と語りました。いまはキジの飼育をまかされていて、寒暖の差で、すぐ弱

る雛の飼育で苦勞しているそうです。

東京から参加したスローライフの会会員からは「十津川村のように共通のキャラクターを作ったらどうか」とか「キジ蕎麦を売りにしたら」などの意見が出ました。特産品の販売については、室崎さんは「全国に売り込もうという気はない。わかっている人の知人に知ってもらって売り切れる程度がいい」とのことでした。一方で、西村さんは会社なので、利益を出さねばならないという現実を抱えています。

私からは30年前、当時の町長が若者定住の条件には、交通網、病院、進学校でない学校があること、そして職・仕事と語っていたことを紹介しました。そして、昭和の時代は、仕事づくりといえば工場誘致でしたが、いまは複数の仕事の掛け持ちで暮らしていく時代だと申し上げました。室崎さんからも、最近の学生は一生その職場に勤めるという気持ちはない、職に対する感覚が違うとのことでした。この辺りが、これからの若者定住のカギになるのではと思います。

また、本題からは少し外れましたが、私は地方自治法が改正され、行政が地域で活動する団体と随意契約できるようになったことも紹介し、行政と団体が従来の対等な関係から上下関係になりかねない懸念が生まれていることも指摘しました。



「パネルディスカッション」

今回は基調講演を設けずに、パネリストから10分ずつのキイノートスピーチをいただき、その中で提言に近い「キーワード」に触れていただきました。分科会アドバイザーからも発言があり、会場の多くの方々から意見・感想をいただきました。全体的に参加性のあるアットホームな場となりました。

- ・ 進行：野口智子（ゆとり研究所、スローライフの会共同代表）
- ・ パネリスト：
 - 濱田省司（高知県知事）
 - 吉田尚人（梶原町長）
 - 増田寛也（日本郵政社長、スローライフの会共同代表）
 - 神野直彦（東京大学名誉教授、スローライフの会顧問）
 - 中村桂子（JT 生命誌研究館名誉館長、スローライフの会共同代表）

以下、発言要約となります。



<濱田省司知事>

集落活動センターを核に多様な交流を

私の方からは高知の中山間地域を再び元気にする、中山間再興の取り組みをお話いたします。

高知県の人口も最近ですと 65 万人代まで減少いたしました。特に、中山間地域では、県全体を上回るスピードで人口減少・高齢化が進んでいます。その結果この集落で活動の担い手、そして日常生活に必要な機能やサービスの低下が年々進行しているということでございます。

そうした中で、高知県では、人口減少対策のマスタープランとして、今年 3 月に「元気な未来創造戦略」を作りまして、その中山間地域版として作っているのが「中山間地域再興ビジョン」という計画です。これは 10 年後に目指す姿で書いておりますが、「地域に若者が増えた持続可能な人口構造のもとでデジタル技術の活用などによって地域で安心して生活できる環境が維持をされ、地域に多様な仕事があり、誰もが将来に希望をもって暮らし続けることができる、活力がある中山間地域」を描いているところです。こういった将来像を目指していくために、若者を増やしていくという目標も新たに掲げました。中山間地域対策での攻めの手を打っていくということが、このビジョンの大きなポイントであります。そして、そうした中で、「集落活動センターの推進」が県全体を通じましても、大きな柱の取り組みの一つとなっています。

この集落活動センターでございますが、例えば旧小学校、保育所のあとや集会所を拠点としまして、生活や福祉、それから特産品作りなどの産業、防災分野などで、地域の方自らが集まり地域を元気にしていく取り組みで、現在 32 の市町村 67 カ所で開設をされています。ここ梶原町では 6 つのセンターについて、合併前の市町村単位で 6 つのセンターを置いていただいて、町内の全域をカバーしているということでありまして、そういう意味でも県内でお手本になるような取り組みをしていただいています。

この集落活動センターを拠点として多様な人材が交流していく、そういう姿を高知県は目指していきたい。10 年後、こうした住民主体の組織が主体となって、多様な人材が交流しながら集落が活性化していく。元気になっていく。そうした高知県を目指して県としても色々な形でバックアップをさせていただきたいと思っているところです。

<吉田尚人町長>

理想郷、共生と循環

まず、本町の基本理念ですが、「子々孫々に幸せな暮らしをつなぐ理想郷・梶原へ」といたしまして、その実現された町の姿を10年後の目指す地域ビジョンとして、みんなが認め合い、助け合い、支えあう土壌が成熟し、光輝く地域社会の実現ができている状況に人々が集まり、経済の再生ができている状況を目指していきたいと考えています。人口減少自体は避けられないことであると考えていますが、梶原に暮らす皆さんが自信と誇りを持ち、心豊かに暮らしている、そのような町をつくっていききたいと思います。

そのような中で、梶原町の取り組みとして、第7次総合振興計画の中で、6つの目指す社会がありまして、現在力を入れて取り組んでいるのが、教育と産業の振興です。ただ、この町が平成11年から取り組んでおります環境に対する取り組みにより、脱炭素先行地域の指定をいただきまして、木質ペレットを利用したバイオマス発電にも取り組もうとしております。森林を活かしながら、地域の人々の暮らしを支え、人類の課題である温暖化対策にも貢献していく意義のある事業に取り組んでいます。

そして、教育の取り組みですが、18年間で子どもを育てる体制づくりとして、小中一貫校を平成23年4月に開校しました。そして、保育・幼稚園が一緒になったこども園、県立高校であります梶原高校、その18年間を通して、「つないで、つづけて、強くする」という中で、子ども達が自分の可能性や才能に目覚め、自分の選択肢を広げ、進路を選んでもらいたいです。その子どもたちがこの町に残ってもらいたいです。学びや仕事で外に出ていった人たちも、いずれは戻ってきて働く、また帰ってこられない人たちも、外からこの町を助けていただくような子供たちに育ててほしいと考えています。

つづきまして、知事のお話にもありました集落活動センターの取り組みです。それぞれの地域の特色を活かしながら地域のオーダーメイドで地域の課題を解決していく仕組みです。この地域の想いを形にして活躍される集落活動センターの取り組みを町として、精一杯支援をしながら伴走していききたいと思います。6つの集落活動センターの中には、それぞれ協議機能を有した推進委員会と実行機能である法人団体があります。そして6つの集落活動センターが情報共有や連携をするため横断的な組織として連絡協議会があり、町内全体で頑張っているところなんです。

そうした集落活動センターを支える人材として、若者の力も必要になってきます。若者がこの町で住んで活躍できるように、若者定住対策審議会として現在

7名の委員の方がいます。この町で住み続けたい町、子育てしたい町になるために何が必要なのか、どのようなことが実現できるのか議論をしていたいておりまして、委員の皆さまが議論したものを、この町のまちづくりに活かしていきたいと考えています。

<増田寛也さん>

地元学と二地域居住を推進

ここはあたたかい雰囲気のある町です。昨晩初めて梶原に泊りましたが、ゆっくり休めました。民宿に猫がいて良かったです。



濱田知事は行政のプロ中のプロ。中山間地をどう活性化するのか、先ほどの確かなお話があったと思います。一般的には「小さな拠点」と呼んでいますが、ここでは「集落活動センター」として高知県はまさに中山間地の活性化の策を実行されています。昨日は2カ所を拝見し、夜の「夜なべ談義」ではほかの3カ所のセンターの方ともお話ができました。

今回のテーマに対して、特に「若者」をどうするのか、キーワード的に二つのことを申し上げます。先ず一つ目は「地元学」。これをどんどんやって、地元の良さを上げていきましょう。今日、午前中、分科会に参加して若い方の意見もうかがいました。町の外に出て広い世界を見て、それから地域故郷を見つめたい人がいます。一方、全く縁がない、外からここにほれ込んで、梶原を目指してくる人もいました。もっと「地元学」を進めて、小中高の間に梶原の良さをとことん学べば、良さが沁み込んで、いずれ戻る、またはここを愛するようになる。結果、若者はどんどん増えていくのではと思います。

岩手県知事時代、山間地では「あれが無い、これが無い」という話が出てきがちでした。そこで「無い無いと言わずに、あるもの探しをしていこうよ」と提案してきました。梶原高校でも既にやっているようですが、そういう地域の良さを知る「地元学」が出来上がれば、故郷を思うようになるはずですよ。

ここは脱藩の道があり、近代国家になる歴史を作った人々を輩出しています。また素晴らしい伝統芸能も伝わっています。木の文化も、隈研吾さんの建築については、“隈さんの建築が世界で一番集積している場所”と、うまい言い方をしていますね。この町のことを、まずは若い人達に学び、知ってもらいたいです。

そして二つ目は「二地域居住」。今年の5月に新しく二地域居住推進法が施行され、この11月から実施されています。いきなり知らない土地に移住するのは

ハードルが高いので、まずは二地域に暮らして両方の良さを活かしていこうという考え方です。今後は、住民票が二カ所にあって、実際にそれぞれに納税して、二カ所の地域活動に参加するというやり方も考えられると思います。そういう発想を持てば、これからの若い人達が、住む場所を柔軟に考えて行けるのではないのでしょうか。

集落の拠点では、普通、地域社会を支える、暮らしを支えるという視点が多いものですが、ここは産業振興にも力点を当てています。この活動にどんどん若い人が混ざってくれるのではないかと。進んでいく方向にこれ以上のものはない、と思います。

<神野直彦さん>

自然村を大切に、若者が導き星に

以前、全国町村会から高知の梶原を見てほしいと言われて、ここに来たことがあります。その時の出会いの感動が忘れられません。梶原町には「自然村」が生きていました。自然村は人間が生まれてから死ぬまでの様々な機能を包括している、つまり命の自給圏、人間の生命を完結しているところです。

日本は1889年の市制・町村制で行政区画を作り、それまでの自然村をつぶしてしまいました。ヨーロッパでは教会をシンボルにして自然村があり、肌を寄せ合うように人間のすべての機能がそこで出来上がっている。そこを上書きするように、行政区画も出来上がっています。ヨーロッパではローカルと言うと、単なる中山間地などということではない、誇りと伝統を持つという言葉です。

日本の場合は自然村が息づいていないので、情報が下から上にあがっていくのが上手くいきません。上から下に流れる中央志向型になってしまいます。梶原は明治からの自然村を残しているので、同じような生活細胞の協力のメリットがあると思います。人間は協力すれば協力するほど自立できるもの、アフリカで豊かな人というのは友達の多い人ですから。それを考えると、ここ梶原のようところがいい、ということになります。

発展とは、良いところを伸ばしていくことです。その人間の良いところ、その組織の良いところを伸ばしていけばいい。悪いところを直しても人並みになるだけです。梶原の良いところを伸ばしていけばいいのです。

若者とは、人間になっていく一つの過程をいいます。世界的に若者の定義は決まっていて、一度死んで生まれ変わる人を若者といいます。つまり、通過儀礼を



越えようとする人間のことを若者というわけです。成人式、正確には成年式ですね。世界の各文化によっては厳しい試練を与えるところもあります。

一度死んで生まれ変わるので、若者はどのように生まれ変わるかという夢を見ます。その夢を持っている若者が次の橋原を創ればいいと思います。経済はものづくりではなり、新しい生活作りが求められています。大都会も生活作りに行き詰っています。千代田区も大過疎地になっている時代です。若者たちが橋原の原点を見つめ、未来に向かって開花させ、新しい時代への導き星になってくれることを期待します。

<中村桂子さん>

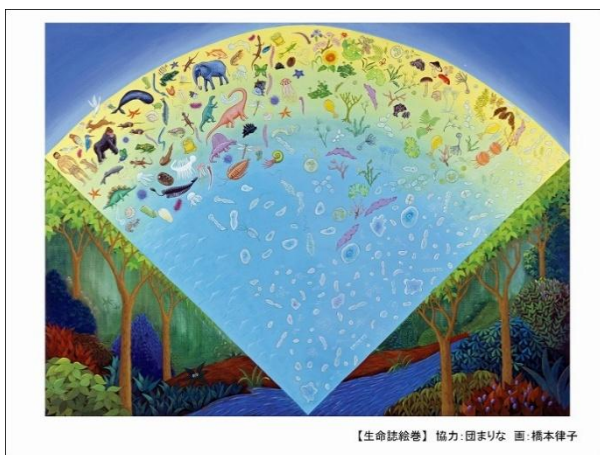
小さいことはいい、暮らしが大事

私は「人間いきものだ」という切り口でお話します。

生きものはとても多様ですが、どれも40億年前にできた細胞から進化した仲間であり、共に生きるものです。ところが、現在は、人間は機械にみなされています。機械は、効率的で、手がかからず、思い通りになることがいい。ところが、いきものは時間がかかり、思い通りにならず、手がかかる。しかも、手がかかるところが大事で、思いがけないことをするのが面白い。

私たちは腸内細菌がなかったら生きていけません。40億年前に生まれたバクテリアと20万年ほど前に生まれた人間が、基本は同じなので一緒に生きられるのです。機械は古いものを捨ててゴミにしていきますね。古いものを捨てず、それを活かしながら新しいことをやっていくのが生きものです。橋原はそれをしています。

ある時、大きな恐竜は絶滅しました。小さなネズミの仲間が残って、私たちの祖先になりました。小さい方がよいことはよくあります。何かをするのに集まりも小さく10人ぐらいたうごきやすいですね。野球もサッカーもサッとわかり



合える。次が30人、これはクラスの仲間ですね。人間の脳がつきあえる人数は150人位。集落はそういう形でできていると思います。都会では集落という言葉が消えています。10人、30人のお付き合いが消えているのです。それがここにあることを大切にしていきたいです。

隈さん設計の図書館、中身と運営

が素晴らしいです。80万人が暮らす東京・世田谷区にもないような形のものが3000人のこの場所で続いているのは素晴らしい。生きものの基本を描いた「生命誌絵巻」を理解し、図書館に置いてくださっていることがとてもうれしかったです。皆様、図書館でいきものについて考えてくださると嬉しいです。

集落活動センターを見て、本当にこれだ、これで行けばいいと思いました。年齢を重ねた方が生き生きとされていました。機械は古くなったら捨てます。でも、生きものは年を重ねることによって、その年齢にしかできないことが出てきます。生き生き年を重ねてきたことを若者に見せないと。それが若者には魅力になります。センターの様子を若い方々に見せて下さい。

一番大事なのは暮らしです。食べ物、「農業」などをきちんとやること。そして暮らす場所、本来の「土木、建築」が大事です。ここは木が活かされています。人工化が過ぎて洪水などが起きています。昔ながらの土と木の土木をやろうという動きが今出ています。ここでしたらそれができるし、見事な暮らし場所が造れますね。そして人づくりの「教育」も。これらが「あたらしい生き方」ではないでしょうか。昨日拝見して、梶原の方が東京よりずっと新しいことができると思いました。



<さらにひとこと>

連携して「ゆすはらスクール」を



「若者は一度亡くなった者が生き返ること、だから夢を持つ。とうかがい、一度、離れても、心の底でそこを思い出し、夢をかなえに戻ってくるように。地域でどんな活躍があるのかを若者に知ってもらうことをどんどんやりたいと思います。若者が地域を思い出したときに、背中を押す体験を小さいうちにたくさんしてほしいです」

「自立していることは、協力によってはじめて自立できる、というお話が心に残りました。今回、高校生や“わかてい”の皆さんと会い意見を聞けました。こういう機会をどんどん作りたいものです」

「学生が十津川村に参加したというお話から、地域にとってそれが開放性に繋がったと実感できました。今回、学生さんが参加していますが、地域に出ていく学部が全国に先駆けてできている高知大学ともっと太い関係を作るといいのでは。優れた集落活動センターのあるここを見聞きすることは、学生にもプラスになると思います。センターに高校生も関わるようになるといいです」

「知事・町長がされている施策は正しいです。物事は短期で見てもダメで、長期的に必ず結果が出てくるはずですよ。参加民主主義のようなことをされているここは、大きさがほどよい町です」

「集落という言葉が最近使ったことがありませんでした。いい言葉ですし、その中身を大事にしていきたいです。自然しかない、というのはとてもいいことです。今まで、人が自然を支配しようとしたのが間違いなのですから。集落や自然を活かすことを、ここで教育を受けた方々が創っていかれるのを期待します」

「今回、地域を支え地域を変える意識をもつ学生を連れて来ました。高知の中で、先を走っているローカルイノベーターだと思います。ご縁をいただけ



たので、今後も繋がっていきたいです」

「二地域居住の法律ができたので、知事と町長で何か新しいことをぜひ」「お試し住宅などの活用に活かしたいと思っています」

「その町民が何を考え、町をどうしていきたくかで移住を決めるという話を以前伺いました。そういうことが大事だと思います」

「“ゆすはらスクール”を創りましょう。古いものを活かす学びとか、文化、産業、歴史、地域学などいろいろ学ぶことができるスクールを。高知大学、スローライフの会が協力し、いろいろな土地の方がオンラインで参加できますし、先生にもなれます。全国を対象にもできます。高校生や若者がそれに企画参加してもいいですね。“ゆすはらスクール”の合宿に各地から泊りにも来れます。そんな仕組みを考えましょう」

このほか、会場参加の方々からたくさんの意見や感想をうかがいました。ぬくもりのある参加性のあるシンポジウムでした。



3 トピック

(1) 案内チラシ

- ・フォーラム案内チラシを9月10日に作り、町内、県内、県外関係者へ配布しました。
- ・チラシのデザインは、専門家に頼まずに、役場職員が対応しました。



(2) 会場設営

- ・「ゆすはら座」の会場装飾は、若者定住対策審議会のメンバーが担当しました。自宅の木の枝を伐って飾り、「神楽」や「よさこい」に使われる面や小道具を装飾し、会場をにぎやかに栲原らしく演出しました。
- ・お金をかけずにアイデアで会場装飾ができました。



(3) 図書館の時間

- ・町外からの参加者には「雲の上の図書館」が好印象でした。ここでは、説明解説者はつかず、各人自由に見学してもらいました。図書館でゆっくりと過ごす時間を体験し、様々な発見もありそれが良かったようです。

(4) 町内での宿泊

・町内のホテルが予約できずに、町外のホテルを一時考えましたが、結局、町内の民宿や簡易宿泊施設を利用しました。このことが、町の素顔に触れられ、宿泊先の皆さんや、宿泊した同士とも仲良くなり、町の好印象となりました。

・「農家民宿いちょうの樹」「民宿ゆうちゃんち」「民宿花の家」「ライダーズイン」にお世話になりました。



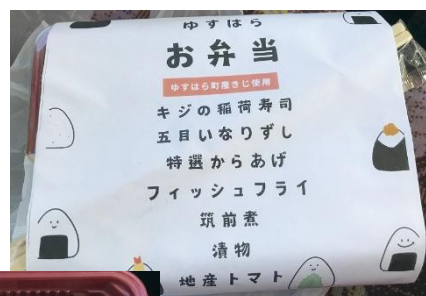
(5) 事業者のご協力

・移動視察バス内での昼食お弁当、分科会後のお弁当、登壇者用のテイクアウトなど、この日のために手間をかけて特別に昼ご飯を準備いただきました。どれも好評でおいしい栲原を印象付けました。



・「夜なべ談義」会場の「トップタイム」には、地元らしい献立、温かいものの提供、食事中心のメニュー、約60人の収容など、ご無理をしていただきました。

・地元スーパーや商店での買い物では、栲原町の日常生活に触れることができました。



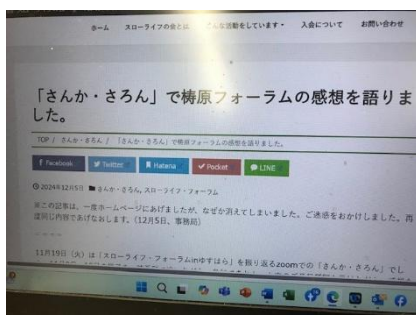
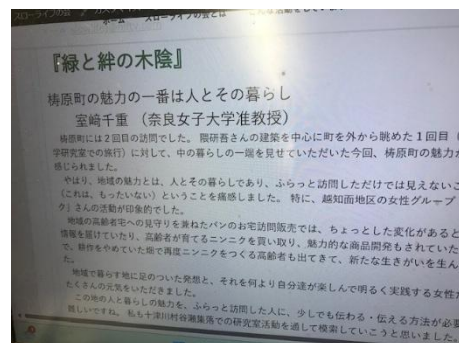
4 開催日以外で

(1) 「スローライフ瓦版」で

- ・事前に、スローライフの会メルマガ「スローライフ瓦版」で、フォーラムの告知を何度も行いました。
- ・開催後「スローライフ瓦版」の11月19日号、11月26日号、12月10日号、12月23日号でフォーラムの感想を掲載しました。ここには、増田寛也さん、中村桂子さん、大学生らからの感想もたくさん寄せられました。

(2) 「さんか・さろん」(オンライン勉強会)で

- ・事前に、9月17日、吉田尚人町長から梶原町の説明をうかがいました。この説明で、梶原のことが良くわかり、梶原行きを決意した方もあります。23人が参加しました。
- ・開催後、11月19日の「さんか・さろん」で21人がオンライン参加してフォーラムの感想を述べ、それをホームページに掲載しました。



5 感想

2000年からスローライフ運動を開始して、24年目にして、「スローライフ・フォーラム」の四国開催が実現しました。2023年に催した京都府綾部市でのフォーラムを、高知県の方にご視察いただき、その後、高知県及び県内での開催地が決まり、23年末から準備が始まりました。



それまで四国のどこで開催できるかと思っていた時期がまるで夢のようで、今や、高知県と梶原町はスローライフ運動の先進、当会に置いて最も親しい土地となっています。

梶原町の皆さん、特色ある建物、豊かな自然、すべてが訪れた者にとっての先生・教材でした。人間サイズの集落と、そこで生き生き過ごす大人たち、そして今回、混ざってくださった高校生、大学生、若者たちとの交流パワーに、これからへの期待が膨らんだものです。

「ゆすはら座」でのシンポジウムに参加したある女性から、「ディスカッションの間、ずっと外で子供たちの遊ぶ声が聞こえていて、それがなんともいい雰囲気でした」と感想がありました。会場の設えをはじめ、様々な所に手作り感があり、梶原の暮らしを感じるあたたかな雰囲気の催しになったことをうれしく思います。

これをご縁に、梶原町、高知県、高知大学、スローライフの会、それぞれが今後も繋がっていききたいものです。これから具体的な仕組みを考えていきましょう。お迎えいただいた地元の多様な皆様、各地からの参加者、学生さん、細やかに配慮いただいた高知県庁、梶原町職員の皆様へ、心より感謝申し上げます。



スローライフの会